申し入れについての補足説明

宮澤・レーン事件を考える会事務局

今回の申し入れについて、直接ご説明する機会がありませんので、とりあえず文書によって補足的な説明をさせていただきます。

1. 案内板とモニュメントの設置をという今回の申し入れは、昨年12月から今年1月末ま

で総合博物館で開催された「宮澤・レーン事件80年特別展」の成果を受けて行うものであります。

私たち「考える会」は、この6年余の活動のなかで、宮澤弘幸・レーン夫妻の人となり、事件の真相、事件が起きた背景等を、多くの研究者やゆかりの人の協力のもとに、地道に明らかにして参りました。その成果が今回の「特別展」にも少なからず反映されていたと考えています。

特別展入場者の感動に満ちた感想文は、今回の特別展が大きな成功を収めたことを示すとともに、新たな課題もまた指摘するものでした(別添の感想文とそれへのコメントを参照してください)。そのことが申し入れの背中を大きく押してくれる力となりました。

２．かつて「北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会」が「心の会の碑」(仮称)の建立を要請したことがあります。しかし、「広める会」の建立趣旨には冤罪の認定、ひいては北大の謝罪という含意があり、同会の活動は大きな市民的ひろがりに欠けていたと思われます。私たち「考える会」の要請は「広める会」のそれと重なる部分もありますが、内容は大きく発展しています。

私たち「考える会」は2016年1月に北大工学部において結成されました。会の運営は一定数の幹事を置くほかは会員制をとらず、さまざまな取り組みの中で理解者・協力者を増やしていくという形で進めております。宮澤弘幸とあわせてレーン夫妻の足跡も明らかにし、毎年7月には「レーン夫妻を語り継ぐ」集い、秋には「宮澤・レーン事件を歩く～北大ピース・ツアー」、12月には宮澤さんの生き方に焦点を当てつつ事件全体を広い視野からとらえることをめざした集いを開いてきました。そしてその成果をいち早く学習資料として発刊し多くの人たちに広めてきました。

わかってきたことは、戦時下における北大生・留学生と外国人教師の交わり(「心の会」)は、札幌農学校以来の北大の基本精神に沿うものであり、北大の歴史の豊かさを示すものではないかということです。「心の会」は宮澤・レーン事件の冤罪性のみで語られるべきものではありません。北大150年の歴史の中の歴史的事実として次代に残すべきものと理解しています。

　　特別展最終日の1月31日に開催した「考える会」幹事会では、案内板とモニュメントの設置を北大に申し入れることを正式に決めました。その後いくつかの集まりを通して多くの市民の意見を聞き、申し入れの内容を検討してきました。今回申し入れ書とともに賛同者の一言を付し、特別展の感想文を添えたのはそうした経緯を踏まえてのことです。最終的には7月16日の「レーン夫妻を語るつどい」においてできるだけ早く申し入れを行うことを確認した次第です

３．北大史の流れの中で

　　北大が秋間美江子さんのお気持を汲み、事件を風化させないために、①文書館年報に記載する、②博物館等で展示をする、③宮澤賞を設ける、④150年史に記載する、ということに誠実に取り組んでおられることは私たち「考える会」も賛成できるものです。今回「考える会」が要望する案内板とモニュメントの設置は、4つの取り組みの発展としてあるもので、対立するものではないと考えております。

　　これほど多くの歴史・文化遺産、建築遺産、自然遺産等を抱えそれぞれ案内板やトレイルが建てられている北大構内に、多くの市民が関心をもっている「外国人教師官舎跡」の案内板があっても不自然ではありません。

申し入れの本文にもありますが、北大は創基150周年に向けて、SDGsの取り組みを北大史の中に位置づけるとともに、昨年末には「ダイバーシティ宣言」を行いました。そのことを私たちは横田篤理事のご講演や寶金総長の「北光一閃　総長コラム」等で学んできました。案内板とモニュメントの設置も「多様性と包摂性」を掲げる北大の未来にふさわしいもの、言い換えると「事件全体を北大史の中に正当に位置づける試み」のひとつではないかと考えております。

なお今回の要請に対して、結論を出すまでには大学としても一定の時間が必要なことは理解しています。資金面を含めて何がしかのお手伝いをしたいものだとの意見が集いの中や賛同の一言にも出ていることも付記いたします。